

1 研究主題

一人一人が学びを実感する生活科授業
～価値ある体験・交流・表現活動を通して～

2 研究主題設定の意図と研究の方法

これまでの『気付きの質を高める』ことを目指した研究において、「できた」「わかった」という気付きを生み出すことはできたが、情意が動くところまでの気付きに至らないことがあった。さらに、学級集団としての気付きの質は高まったが、個に焦点を当てた場合、一人一人の子どもの思いや願いを十分に生かしきれない場合もあった。

そこで、個に焦点を当て、一人一人の思いや願いを生かし、一人一人が学びを実感する生活科授業を目指し、研究を進めることとした。

3 研究の方法

学びを実感できる授業づくりのために、活動を「思いや願いを生む体験」「気付きを自覚する表現」「気付きを認めてもらう交流」の3つに分類し、単元全体の中にバランス良く組み込むことが大切であることが昨年度の研究で明らかになった。今年度は、「体験」「表現」「交流」の3つの活動を、単元を通して行う継続的活動と、適宜行うイベント的活動に整理し、さらに、3つの活動相互の関連を明確にしていく。そして、3つの活動を効果的に組み合わせる。このことにより、活動への意識や意欲を継続させ、学びが連続し、学びを実感させることを目指した。

4 研究授業の実際

(1) 第2学年「わたしの町大好き(2)～たんけん はっけん 大ぼうけん～」

本単元は、探検を通して地域に住む人たちと積極的に交流し、町のよさと同時にそこに住む人たちのよさにも触れさせ、交流を深めさせる授業実践である。本時では、教師の意図的な指名や関連づけによって、子どもたちの考えをつなげていくことで、どのグループの探検先にも共通にお店の人の思いがあることに気付いていった。

今までの探検では、子どもたちは探検先にある「もの」に目が向いていたが、本時の話し合いによって「もの」から「ひと」「ひとへの思い」へと目が向き、「もっとお店の人に聞いてみたい」という意欲や気付きに広がりをもたせることができた。

(2) 第2学年「おもりを使ったおもちゃ」

本単元は、坂を転がるおもちゃについて、「輪」と「おもり」を材料にして、自分なりの工夫をしながら、おもちゃ作りや遊びに没頭することで、様々なことに気付かせる授業実践である。

活動開始前に、自分の思い通りにいかない友達を助けてあげるアイデアを出す話し合いの場を設定した。前時に自分がやったことを振り返り、「〇〇したら〇〇になった。」と、気付きを自覚する姿が見られた。また、話し合いで友達の工夫を聞くことは、これから自分がやりたいことに対する視点をもつことにも有効であった。子どもたちは、自分で繰り返し試しながら自分のおもちゃ作りに没頭していく姿が見られた。自分が試してみるための材料を自由に使えることで、子どもたちは何度も作ったり遊びの試しをしたりして、おもちゃの動きの変化を感じることができた。



5 成果と今後の課題

(1) 成果

「体験」「表現」「交流」それぞれを継続的活動とイベント的活動に分け、どこにどのように組み込むか、何に重点を置くかを明確にした単元構想図を作成し学習を進めることで、「学ぶ実感」がより確かなものになった。

また、教師の意図的な指名や関連・価値付け・意味付けは、友達の学びから自分を振り返り気付きを深めることに有効に働いた。

(2) 課題

活動を設定する際、「気付きの質を高めたい」という教師の願いが強くなりすぎ、素材や活動を絞りすぎることがあった。子どもの気持ちに寄り添うところからスタートし、「情意が動く気付き」を目指すにはどんな体験をさせたらよいかについて、再度検討していく必要がある。